

連載「ジオと喜界島」

第2回「ジオと集落」

喜界島サンゴ礁科学研究所：吉田桃英

今回は、シマあるきガイドのボランティア組織「よんよ〜り喜界島」で活躍し、島の歴史にとっても詳しい外内淳(とのちすなお)さんにお話を伺いました。

—喜界島の大地「ジオ」と集落にはどのような関係がありますか?—

外内：喜界島は集落が多いでしょう。これは人間が生きていく上で必要な「水」が関係しています。水の湧き出る場所に人が住み着き集落ができます。さらに、湧き出た水は地下の川を流れて海に行き着くので、水の流れに沿っても集落ができるようですね。ではなぜ喜界島には水の湧き出る場所が多いのでしょうか？喜界島の地面(ジオ)は主に、泥とその上をおおうサンゴの化石からできています。泥は水を通しにくく、逆にサンゴの化石は水をよく通しますので、その境目から水が湧き出ます。島にはこの境目が多くて湧水場所も多いので、それが集落の多さに繋がっていると思います。

また、それぞれの集落には違った個性があります。現在の喜界島の農業は、サトウキビ作りが中心ですが、なだらかな場所が広がる島の北西側の

集落ではコメ作りが盛んでした。反対に、崖が迫っている東側の集落はコメ作りができる場所が狭かったかもしれませんね。このように島の集落は場所によって取り巻く地形(ジオ)が違って、採ることができる食べ物や材料が違っていたのです。また、喜界島では古くから集落の間で足りないものを補い合う習慣がありました。例えば、海近くの集落でしか作れない塩と、山近くの集落でしか採れない竹や木が交換されていたようです。このように、どの集落も、囲まれた自然を細かく理解し、自然とやりとりして生きていく必要がありました。先人の方々のその英知の積み重ねが、個性が違う集落をつくりあげたのですね。

—島の方々は様々な自然(ジオ)に暮らしを合わせながら、ジオと共に生きてきたのですね。貴重なお話をありがとうございました!—



大朝戸、西目のウツカー(湧水)